賞　味　期　限

代表取締役社長　大多和　巖

昨年秋の土曜日、ひょんなことから著名な国際的オペラ歌手、岡村喬生（おかむらたかお）氏の「世界を巡る歌の旅」というリサイタルを聞いた。氏のホームページを見ると氏は音楽学校の出身ではなく新聞記者を目指して早稲田の政経に入学するが、かの有名なグリークラブに誘われたのをきっかけに歌の道を邁進し、28歳でイタリアに留学し国際コンクールで優勝、以後数々の世界の檜舞台を踏んで日本を代表するオペラ歌手になったとある。我々も若い頃、あの「重厚なるバス」に大いに憧れたものであるが、未だ現役で活躍しておられるとは不覚にも失念していた。

なかなか楽しいリサイタルで、題名のとおり日本の歌曲から始まってロシアに行き「ステンカラージン」、ヨーロッパはお得意のシューベルトの「魔王」「菩提樹」、「オーソレミーオ」ほかでイタリア、南米ではアルゼンチン・タンゴの「カミニート」を歌い、北に行って南部のニグロ・スピリチュアル「オールドブラックジョー」、最後に日本に舞い戻って「さとうきび畑」「ソーラン節」ほかというものであった。

トークがまた楽しい。氏は昭和6年生まれで今年77歳、この歳でマイクなしで歌っているオペラ歌手はまずいないと言っておられるが、500 人入る小ホールとはいえその低音は朗々と響き渡る。曲と曲の間、間奏の間はステージ上のグランドピアノにもたれかかり、前半、後半に各1曲あった伴奏の松川儒氏のソロの間はピアノ脇に椅子を置いてまるでぐったりと目を瞑っておられるが、一旦歌が始まると背筋がビシッと伸びる。今日の日本の繁栄のもとには沖縄のあの犠牲があったんだ、と言って12～3分はある「さとうきび畑」を熱唱、用意されたアンコール曲も含めて3時間の大舞台であった。今春もシューベルトの歌曲集「ヴィンターライゼ（冬の旅）」全24曲の公演が決まっているとのことで、意気軒昂である。

我が身を振り返って、76歳を迎える頃、どんな生き方をしているだろう？そもそも元気でいるのだろうか？氏の活躍を見るにつけその実力とパワー、情熱に深甚なる敬意を表するとともに、軽い羨望の念すら覚える。

トークの冒頭「今年もいろんなことがありました。食品の偽装、賞味期限の改ざん等々、良くありませんねえ･･･私もだんだん賞味期限が少なくなってきましたが、良い歌、良い音楽には賞味期限がないんですよ･･･」と淡々と語られたのが印象的であった。2008年も多難の様相である。サブプライムローンに端を発した米国を中心とする金融システム不安の解消にはしばらく時間がかかりそうであるし、それに伴う景気減速も懸念される。我が国では人口減少社会の到来を控えて社会・経済システムの見直し、方向付けが急務である。我が国の強み、良き伝統、優れた文化等々、これらの賞味期限が切れないよう、また切らさないよう官民上げての努力が求められるし、我々ＪＡグループも、またＪＡバンクシステムも、その鮮度を常に高めながら賞味期限など物ともしない確たる存在であり続けたい。新春の想いである。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます